

各委員会活動

当事業団の委員会は、事故防止委員会、薬事委員会、安全衛生・環境整備委員会、研究・研修・図書委員会、情報システム委員会により構成されている。医療の質の向上と安全性の確保、日常業務の効率化等の諸問題に対して活発な討議を行っている。個人情報の取り扱いについては、個人情報保護法に基づき研修会や広報を適時行い、全職員に周知徹底を図っている。主な委員会のこの1年間の活動状況は以下のとおりである。

事故防止委員会

1. 当診療所におけるインシデント・アクシデントレポート報告に対する対策

今年度のアクシデントは昨年より一件多い6件、インシデントは例年より少ない2件であった。

今年度は身体危険度が軽度である採血後疼痛とバリウム誤嚥があった。採血もれ・痛み痺れの報告は2例あり、当日のみの対処で済んだものはインシデント、後日受診し説明したものがアクシデントとして報告があった。採血に関しては去年度から統一した記載様式にて報告を受けている。トラブル発生後の対処や説明を受診者にも心配をかけないようにマニュアルに従って実施し記録することにより、初期の対処法をきちんとするように努めている。バリウムの誤嚥は1例あった。当日もタッピング・ハフティングなどの処置を行い説明をして帰っていただいたが、翌日発熱したとの連絡があり、来院していただき抗生剤の投与を行なった。この方は、小脳血管芽腫術後6年目であり術後の2021/2023とトラブルなくMDLを実施しており、慎重に検査を行っていたが誤嚥された。翌日の外来受診では普段からむせやすいという申告があったが、むせやすいという情報は検査当日には確認できていなかった。誤嚥のリスクのある方に対する問診はより詳細に行うよう注意したい。その方は1ヶ月後に再来院してレントゲン撮影したが、薄く淡く器質化あり、主治医に報告し、来年からはバリウム検査は受けないように勧めた。なお今年は針刺事故や転倒事故は起こらなかった。

	6年度			5年度	4年度	3年度	2年度	元年度
	ア	イ	内容	ア	ア	ア	ア	ア
1 検査健診項目	2	0	尿沈渣・項目誤り会計もれ	3	2	5	0	4
2 データ管理	1	0	風疹問診票医師サインもれ	0	2	5	2	4
3 個人情報管理	1	1	風疹結果表渡し間違・誤送付	0	0	0	0	0
4 機器管理トラブル	0	0		0	0	0	0	0
5 治療処置	2	1	採血後疼痛2・バリウム誤嚥	0	3	3	2	0
6 転倒転落	0	0		1	0	0	1	0
7 その他	0	0		1	0	0	0	3
計	6件	2件		5件	4件	13件	5件	11件

2. 医療機関における事例情報共有

医療事故調査制度によると、今まで月約30件の事故報告が上がっている。今年度の提言は、「第20号血液検査パニック値に係る死亡事例の分析」であり、今年から始まった警鐘レポート「No.1ペーシングワイヤー抜去に伴う心損傷による死亡」「No.2注射剤の血管内投与後に発生したアナフィラキシーによる死亡」であった。当診療所ではアナフィラキシー発生は起こったことはないが、CT造影剤や内視鏡検査時の注射を行うこともあるので、関連部署にしっかりと対策するように勧めた。

また日本医療機能評価機構の医療安全情報を委員会で発表し、当診療所に係る情報を提供した。今年度は「中心静脈から投与すべき輸液の末梢静脈からの投与」「加温加湿器との併用による人工鼻の閉塞」「体内に迷入した開放式ドレーンの発見の遅れ」「シリンジポンプの注射器の交換間違い」「開放式三方活栓の誤った取り扱い」「食事中止時のインスリン投与による低血糖」「永久気管孔のある患者への無効な換気」「金属針との併用によるガイドワイヤーの破損」「X線画像確認時の経鼻栄養チューブ後挿入の見落とし」「セントラルモニタへの無線式送信機番号の登録忘れ」などを報告し、関連部署に注意を喚起した。

3.その他

Youtube動画で今年度2回（夏と冬2本ずつ）職員教育を実施し、各職員が視聴したことを確認している。

https://www.youtube.com/watch?v=_sii-Q40Azc 感染症対策の基本

https://www.youtube.com/watch?v=NW4Qs7-wl_w 指差呼称訓練

<https://www.youtube.com/watch?v=9IDOXPh7qGs> 医療チームのコミュニケーション

https://www.youtube.com/watch?v=aHUxSh_-TU4 思い込みによるミスをなくすには

今後も医療安全情報を発信し、インシデント・アクシデント事例をまとめその対策を確認し、繰り返し発信することで、職員教育にも生かしていく。来年度は、事故防止という観点からマニュアルの更新を行い、新しく入団された職員にも徹底していただく。

（山下 毅 記）

安全衛生・環境整備委員会

■恒常的活動

1. 安全衛生

- ①健康管理：職員の定期健康診断、当診療所および他院の外来受診状況から、職員の健康管理を行った。安全衛生教育および安全衛生情報の提供を実施した。また、ストレスチェックを実施した。今年度も新型コロナウイルス感染症に対し、情報の提供と予防の観点から助言を行った。最新の医療情報の提供も実施した。
 - ②労務管理：産前産後休業や時短勤務状況および超過勤務状況から労務管理状況を把握し、必要であれば職員個人および部門に改善を求めた。
 - ③労働環境衛生：職場巡視等を実施して労働環境整備に関する助言を行った。
 - ④防災：東日本大震災、熊本地震および能登半島地震の教訓から、防災グッズの更新・新規購入と保管先について確認した。
- ①-④により、職員が健康で安全に働ける職場作りを目指した。

2. 環境整備

- ①職場巡視により、利用者目線での施設・設備について、特にハード面での補修・改善、工事の必要性に関して事務局に提案した。
- ②労働環境測定結果を定期的に報告し、冷暖房の効きがよくない場所については扇風機、暖房器具による対応を促した。
- ③施設利用状況に対する職員の指摘メモ(CSメモ: customer satisfaction)、当健診センターおよび診療所利用者の声（ご意見箱アンケート等）をもとに事実関係を各部門に報告して改善を促した。

④定期的な掲示物のチェックと受診者用図書ならびに医療関係ビデオの管理を行った。

①—④により、結果として利用者が安心・信頼できる組織・施設作りを目指した。

■今年度の特性

【1】安全衛生:

○今年度も定期健康診断時に、腫瘍マーカーの測定、希望者に乳腺エコー検査を実施した。定期健康診断の結果については、全体的には職員の健康状態はおおむね良好で、重大疾患や事故・労災の発生を認めなかった。新型コロナウイルスに感染により休職した職員は計6名であった。

○労務管理上、新型コロナウイルス感染に伴う受診者数の減少により、超過勤務は減少し、それに伴う健康被害も認めなかった。

○夏期に多い細菌性食中毒・夏かぜ・熱中症と冬期に多いインフルエンザ、ノロウイルスへの予防と体調管理、冬から春に多い季節性アレルギー疾患についての情報提供と対策を報告した。希望者に無償でインフルエンザワクチンの接種(36名)とインフルエンザ予防薬の配布(希望者なし)を実施した。さらに、昨年度に引き続き今年度も新型コロナウイルス感染症が猛威を振るったため、情報提供と予防対策について助言し、診療所入口の新型コロナウイルス感染症の疑いがある受診者への対応策は昨年引き続き掲示した。

①新型コロナウイルス感染症についての情報提供:

3密を避け、マスクの着用、うがい・手洗い・体調管理をすること。健診側・外来側とも新型コロナウイルス対策を実施中。

②その他の医療情報について

- ・夏期に多い細菌性食中毒、夏かぜ、熱中症に対する予防と体調管理
- ・冬期のインフルエンザ、ノロウイルスへの予防と体調管理
- ・花粉症対策について

一月別医療情報について

5月

・新型コロナ・インフルエンザのウイルス感染者数は減少している。

・花粉症は落ち着いてきている。

・熱中症に注意。

・朝食を抜く、早食いをする、夕食後に間食をする、就寝前2時間以内に夕食を食べるといった食習慣は2型糖尿病の発症リスクを有意に上昇させることが京都府立医科大学の豊國らの研究によって示された。

(Journal of Diabetes Investigation オンライン 2024.4.2.)

・両親が中年期に肥満だった場合、その子どもも中年期に肥満になる可能性は、両親が正常体重だった場合に比べて6倍高く、また両親のどちらかが中年期に肥満だった場合でも、子どもが中年期に肥満になる可能性は3倍以上高いことがノルウェー北極大学地域医療学のMari Mikkelsenらの研究で示された。(2024.5.12.~15. 欧州肥満学会にて発表)

・夜間の屋外照明が脳血管疾患の発症リスクを高めることが浙江大学医学部のJian-Bing Wangらの研究によって示された。(Stroke 2024.3.25.)

・心血管疾患患者の89%が1日当たりの推奨摂取量を上回るナトリウムを摂取していることが米Piedmont Athens Regional病院のElsie Kodjoeらの研究で報告された。(2024.4.6.~8. 米国心臓病学会)

・認知症のリスク因子の中で修正可能なものとしては、糖尿病、大気汚染、飲酒という三つの因子の影響が特に大きいとする研究結果が英オックスフォード大学のGwenaelle Douaudらによって報告された。

(Nature Communications 2024.3.27.)

6月

- ・インフルエンザ及び新型コロナの感染者は下火になっている。密な場所や人混みの中ではマスク着用、手洗いなどの感染対策を継続することは大事である。
- ・日本人における果物や野菜、ビタミンCの食事による摂取は、男女ともに認知障害のリスク低減につながる可能性が筑波大学の岸田らの研究によって示された。(Journal of Nutrition オンライン 2024.4.8.)
- ・少し高い血圧(正常高値血圧120-129かつ<80)の段階から、脳・心血管疾患の発症リスクが高まることが、桑原(横浜市立大学医学部公衆衛生学)らの研究グループによって確認された。(Hypertension Research オンライン 2024.4.8.)
- ・3杯/日以上のコffee摂取は、メタボリックシンドロームの総合的な重症度の低下と関連している一方で、カフェインレスコーヒーや紅茶ではその関連が認められなかったことを中国・Peking Union Medical College HospitalのHe Zhaoらによって報告された。(European J Nutrition オンライン 2024.5.4.)
- ・中～高強度身体活動時間、及び歩数が多いほど生存期間が長かった。(JAMA Internal Medicine オンライン 2024.4.8.)
- ・加糖飲料、炭酸飲料、野菜・フルーツジュース、加糖コーヒーはうつ病リスクを上昇させる可能性がある一方、ブラックコーヒーは低下させる可能性があることを国立精神神経医療研究センターの成田らによって示された。(Clinical Nutrition オンライン 2024.4.17.)

7月

- ・コロナ感染者が増加傾向。これまで通り人混みの中でのマスク着用は感染防禦に有効である。
- ・マスクが強制でない3時間未満の短いフライトと比較して、マスクが強制でない6時間以上の長いフライトでは感染リスクが26倍に及ぶことや、マスク必須の場合では長時間のフライトでも感染が報告されなかったことが米国・スタンフォード大学のDiana Zhaoらの研究で判明。(International Journal of Environmental Research and Public Health 2024.5.21.)
- ・総フラボノイド摂取量が多いほど高血圧症患者の全死亡リスクが低減するという正の相関関係が認められたことを、中国・Second Xiangya Hospital of Central South UniversityのKang Wangらが報告。(Nutrients 2024.5.20.)
- ・地中海式ダイエットを遵守している女性は全死亡リスク、がんや心血管疾患による死亡リスクが低く、この関連にはホモシステインなどの低分子代謝物質の多寡が寄与していることを、米ブリガム・アンド・ウィメンズ病院のSamia Moraらが報告。(JAMA Network Open 2024.5.31.)
- ・コーヒーや紅茶の摂取において、1日当たり3杯以上のコーヒーまたは紅茶の摂取は、AD(アルツハイマー病)、VaD(血管性認知症)に対する保護効果が認められた。多量のコーヒーおよび紅茶の摂取によるADの保護効果は、女性および高血圧症患者でより顕著であった。台湾・国立台湾大学のKuan-Chu Houらの報告(Journal of the Formosan Medical Association オンライン 2024.5.6.)
- ・血糖コントロールを目的に運動をするなら夕方から夜間にかけて行う方が良いことを示唆するデータをグラナダ大学(スペイン)のJonatan Ruizらが報告。(Obesity 2024.6.10.)

8月

- ・オミクロン株の新たな変異株であり、感染力が強く主にのどの痛みや発熱症状がある「KP.3」が流行中。手洗いや消毒、室内の換気、適切なマスクの着脱を呼びかけている。手足口病も患者数が増加している。手足口病は、アルコール消毒は無効で、石鹼・流水による手洗いが有効的である。
- ・新型コロナ感染者と15分間対面した時の感染リスクは、感染者のマスク着用の有無と対面距離、変異株によって異なる。(参考:理化学研究所計算科学研究センター 2022.2.2.記者勉強会 発表資料)

- ・14日間にわたり公共の場でサージカルフェイスマスクを着用した場合、着用しない場合と比較して、自己申告に基づく呼吸器感染症の症状発症リスクが有意に減少したことをノルウェー公衆衛生研究所の Runar Barstand Solbergらが報告。(BMJ 2024.7.24.)
- ・マルチビタミンの毎日の摂取が、寿命延長を裏付けるエビデンスは得られなかったことを米国立がん研究所(NCI)がん疫学・遺伝学部門のErikka Loftfieldらが報告。(JAMA Network Open 2024.6.26.)
- ・大豆食品由来のイソフラボンの摂取量が多い学齢期(7~13歳)の子どもは、摂取量の少ない子どもよりも注意力と思考能力が高いことを米イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校のAjla Bristinaらが報告。(米国栄養学会(ASN)年次総会 Nutrition 2024.6.29.~7.2.、米シカゴ)
- ・がんによる死亡の半数近くとがん症例の4割に、喫煙や運動不足などのライフスタイルが関係していることを米 国がん協会(ACS)がん格差研究のシニア・サイエンティフィック・ディレクターを務める Farhad Islamiらが報告。(CA:A Cancer Journal for Clinicians 2024.7.11.)

9月

- ・1日のコーヒーの摂取量が5杯以上で脳卒中全体と脳梗塞リスクが高まり、逆に緑茶を摂取する人ではリスクが低かった。この結果から1日5杯以上のコーヒーの摂取を控えることを検討するよう提案している。(カナダ、Journal of Cancer オンライン 2024.6.18.)
- ・歯の喪失は心血管疾患(CVD)による死亡リスクと関連しており、失った歯の本数が多いほど、そのリスクが高くなる可能性があることが明らかとなった。歯を喪失した人では、歯を喪失していない人に比べてCVDによる死亡リスクが66%高くなっている。定期的な歯科検診と予防ケアが重要である。(米国、Journal of Endodontics 2024.6.28.)
- ・米国におけるがん罹患の約44%が喫煙、過体重、飲酒が主要なリスク因子であることが明らかとなった。予防策を幅広く公平に実施することにより、がんの負担を大幅に軽減できる可能性がある。禁煙支援プログラムの拡充、バランスの取れた食事、定期的な運動による健康的な体重維持、適切な 飲酒制限などがん予防に有効である。(米国がん協会 Cancer Journal for Clinicians オンライン 2024.7.11.)

10月

- ・感染症は全体的に落ち着いているが、マイコプラズマ肺炎が流行っている。抗生剤が有効。麻疹は埼玉県で発症事例あり。感染力が強いので注意すること。新型コロナウイルス感染症は落ち着いている
- ・ウィークデーの睡眠不足を週末に補う「キャッチアップ睡眠」は、心臓病のリスクを最大20%低下させる可能性のあることが中国のYanjun Songらによる研究で明らかになった。(2024.8.29. Health Day News)
- ・穀物や植物由来の植物性脂肪摂取量が多いと、全死亡率および心血管疾患(CVD)死亡率が低下する。(中国 JAMA Internal Medicine 2024.8.12.)
- ・50歳以下で大腸がんを発症する若年発症大腸がん患者が増加傾向にある。若年患者と60歳以上の高齢患者を比較し、食生活の違いに起因することが明らかになった。若年者の大腸がんについては、赤肉や加工肉の長期にわたる過剰摂取が主な要因である可能性が示唆された。(NPJ Precision Oncology 2024.7.17.)
- ・新たなシンデカン-2メチル化(mSDC2)便検査により、大腸がん(CRC)および進行大腸腫瘍(ACN)の検出率が向上する可能性がある。(中国、Medscape 2024.8.16.)
- ・毎日のナッツ摂取と認知症リスク低下との関連が示唆された(スペイン、GeroScience オンライン 2024.9.30.)。
- ・経鼻投薬による季節性インフルエンザワクチンが、今シーズンより供給開始の予定(第一三共)、対象者は2歳以上19歳未満。

11月

- ・東北大学の木内らの研究によると、高齢者の歯の数が多いと、認知症のない平均余命及び認知症の有無に関わらない平均余命が長くなることが示唆された。(JAMDA 2024.11.)
- ・台湾・National Taiwan Normal UniversityのChi Hsiaoらがウィークデーの睡眠不足を週末に補う「キャッチアップ睡眠」は、認知機能障害のリスクを70%以上低下させる可能性を報告した。(Sleep Breath 2024.10.)
- ・英国・クイーンズ大学ベルファスト校のAmy Jenningsらによると、ベリー類やお茶（紅茶、緑茶）赤ワイン、ダークチョコレートなどのフラボノイドを日常的に摂取する事で認知症リスクが大幅に低減されることが示唆された。(JAMA Network Open 2024.9.18.)
- ・トゥルク大学（フィンランド）のJoaq Norhalにより、腰痛のリスクのある人は毎日わずかでも座位時間を減らすことで腰痛の悪化を抑えられる可能性が示唆された。(BMJ Open 2024.9.28)
- ・米国立眼研究所（NEI）網膜神経生理学部門のWei Liの報告によると、ジュウサンセンジリスから白内障を改善する可能性のあるタンパク質RNFI14が同定された。動物実験の結果が人間に再現されるとは限らないが、手術なしで白内障を治療できる可能性が出てきた。(JCI 2024.9.17.)
- ・米マサチューセッツ総合病院不整脈センターのShaan Khurshidらによると、毎日運動するのと週末に集中して行うのとで、健康に対して同程度のプラス効果が期待できる。(Circulation 2024.9.26.)
- ・米ミシガン大学のThuy Leらは、高齢者になってから禁煙した場合でも、喫煙を続けた人より寿命が延びることが示された。(AJPM 2024.6.25.)

12月

- ・オメガ3・6脂肪酸の摂取はがん予防に有効か？多価不飽和脂肪酸（PUFA）の血中濃度ががんリスクに関連することが新たな研究で示された。オメガ3は結腸がんや肝胆道がんなど4種類、オメガ6は結腸がんや膀胱がんなど13種類のリスク低下と関係があると判明。研究者は、食事でのPUFA摂取を増やす重要性を指摘している。(International Journal of Cancer 2024.10.17.)
- ・1日わずか5分の身体活動の追加が血圧低下に効果的・毎日の生活の中に、自転車に乗るなどの運動に近い身体活動をわずか5分加えるだけで、血圧が下がり、心血管疾患のリスク低下につながる可能性のあることが、新たな研究で明らかになった。(Circulation 2024.11.6.)
- ・高強度の運動は空腹感を抑制する。高強度の運動は、低強度の運動よりも食欲増進ホルモンであるグレリンの抑制に効果的で、特に女性でその効果が顕著であることが分かった。グレリンには2種類（AGとDAG）があり、エネルギーバランスや食欲などに影響を与えるが、運動強度がこれらに及ぼす影響についての研究は限られている。(Journal of the Endocrine Society 2024.11.)
- ・高齢者の認知症予防に最も有用な野菜の種類は？オーストラリアの研究で、高齢女性における特定の野菜摂取量と老年性認知症リスクの関連が調査された。対象は70歳以上の1,206人で、野菜の総摂取量や種類別摂取量を1998年の調査票で推定。80歳以降に発症する認知症リスクとの関連を分析した結果、ネギ、有色野菜が認知症予防に有用であることが示唆された。(Food & Function 2024.10.28.)
- ・果物が大腸がんリスクを抑える～メンデルランダム化解析・韓国ソウル大学の研究が、遺伝的変異を利用したメンデルランダム化（MR）アプローチで食事摂取と大腸がんリスクの因果関係を分析した。MR解析と観察解析により、果物の摂取量が増加すると、大腸がんリスクが21%減少することが示された。(BMC Cancer 2024.9.17.)

1月

- ・第65回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会予防接種基本方針部会(2024.12.18.)において、帯状疱疹ワクチンの定期接種化が了承された。2025年4月1日より原則65歳を対象に定期接種が開始される見込み。5年間の経過措置として、70歳、75歳、80歳、85歳、90歳、95歳、100歳時に接種する機会を設ける方針。使用するワクチンは、乾燥弱毒生水痘ワクチン(1回皮下注、5年間有効)、または乾燥組み換え帯状疱疹ワクチン(2ヵ月以上7ヵ月未満の間隔を置いて2回筋注、10年間有効)となる。
- ・タクシーと救急車の運転手は、アルツハイマー病による死亡率がすべての職業の中で最も低いことが、米国ハーバード医学大学院・ブリガム&ウィメンズ病院のVishal R.Patelらによる研究で示された。(BMJ 2024.12.17.クリスマス特集号)
- ・睡眠習慣が不規則な人では、規則的な人に比べて主要心血管イベントの発生リスクが26%高いことが、東オンタリオ小児病院研究所のJean-Philippe Chaputらの研究で示された。(Journal of Epidemiology & Community Health 2024.11.27.)
- ・日本人において、男女ともにヨーグルトの摂取量が多いほど全死因死亡リスクが低く、女性ではさらに乳製品全般および牛乳摂取と全死因死亡リスク、牛乳摂取とがん死亡リスク、ヨーグルト摂取と心血管疾患死亡リスクの低下が関連していたことを、慶應義塾大学の宮川らが明らかにした。(Journal of Atherosclerosis and Thrombosis オンライン 2024.11.13.)
- ・ビールのみを飲む人は、ワインや蒸留酒のみを飲む人と比べて、食事の質が低く、身体活動量が少なく、喫煙者が多い傾向があることが、米デュレーン大学のMadeline Novack氏らの研究で明らかになった。(Nutrients 2024.11.13.)
- ・1日の水分摂取量の増加が体重減少や腎結石予防に有益であることが、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校のNizar Hakamらの研究によって示された。また片頭痛予防、尿路感染症などに対する有益性も示唆された。(JAMA Network Open 2024.11.25.)

2月

- ・CVDを併存する肥満者の大幅な体重増加がCVDによる死亡及び全死亡リスクを高めることが明らかになった。体重が安定していた群(体重減少または増加が5kg未満)と比較して、大幅な体重増加がみられた群(10kg以上)においてCVD死亡および全死亡リスクの増加がみられた。(英国 ラスキン大学 Jufen Zhang 2025.1.)
- ・米国・スタンフォード大学医療センターのTaotao Yanらが、性別ごとに肝臓関連疾患の転帰と肝臓以外の疾患の転帰について比較推定した。女性の方が肝硬変の発症率とリスクが高いことが分かった。また、男性はHCCリスク増との有意な関連性と、女性よりもCVDと性別に関係のないがんのリスクが高いことが分かった。(JAMA Network Open 2024.12.4.)
- ・英ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)のアルコール・タバコ研究グループのSarah Jacksonらによる研究で、紙巻きたばこを1本吸うごとに寿命が最大22分短縮する可能性のあることが明らかにされた。男女全体では20分、男性では17分、女性では22分と推定された。(Addiction 2024.12.29.)
- ・慶應義塾大学の是木らが、中年期における緑茶やコーヒーの摂取が認知症予防に及ぼす影響を報告した。毎日2-3杯の緑茶を摂取した人は、認知機能低下リスクの有意な減少が認められた。4杯以上の摂取により、統計学的に有意な差は消失した。緑茶による認知機能保護効果は、特に男性で確認された。高齢者では毎日1杯以上のコーヒー摂取により認知機能低下リスクの有意な減少が確認された。(Journal of Alzheimer's Disease オンライン 2025.1.8.)

- ・米国・テュレーン大学のXuan Wangらの研究グループは、朝のコーヒー摂取が全死亡および心血管死のリスク低下と関連したが、終日にわたってコーヒーを摂取する場合はその関連がみられなかったことが報告された。(European Heart Journal オンライン 2025.1.8.)

3月

- ・加糖飲料が2型糖尿病や心血管疾患の発症に関係していることが報告された。長期にわたる加糖飲料の習慣的な摂取は、体重増加、インスリン抵抗性、2型糖尿病や心血管疾患の発症につながる。米国カリフォルニア州では課税に伴う加糖飲料の価格上昇による消費量減少が観察され、売上減少とともにBMIの平均値が低下した。(Nature Medicine 2024.1.6.)
- ・2型糖尿病、脂質異常症、高血圧の既往の家族歴を解析すると、3疾患とも家族に既往者がいるほど有病率が増加し、特に2型糖尿病は家族歴が全くない人の約20倍という結果が示された。(Mayo Clinic Proceedings オンライン 2025.1.29.)
- ・チョコレート摂取と2型糖尿病の関係について、ミルクチョコレートは、摂取頻度とリスクとの関連が認められなかったが、ダークチョコレートは、摂取頻度が高いほど2型糖尿病のリスクが低下した。(The BMJ 2024.12.4.)
- ・週30分の有酸素運動で、肥満者におけるゆるやかな体重減少がみられた。著名な減少を達成するためには、中程度～強度の有酸素運動を週150分継続することが必要な可能性が報告された。(JAMA Network Open 2024.12.26.)
- ・心血管疾患と累積喫煙量や禁煙後の経過年数との関連を検討した。累積喫煙量と心血管疾患リスクとの関係は、現喫煙者および元喫煙者の双方で用量依存적であった。禁煙後の経過年数が長いほど心血管疾患リスクは低下し、禁煙後5年以内に効果がみられた。喫煙未経験者と比べると元喫煙者では禁煙後20年以上が経過しても心血管疾患リスクは高いままであった。(JAMA Network Open 2024.11.1.)
- ・食物繊維を通して有益な腸内細菌を養うことで、感染症に対する体の抵抗力が強化される可能性が明らかとなった。野菜、豆、全粒穀物などの食物繊維が豊富な食品を摂取することで増えるフィーカリバクテリウム属は、腸内に存在すると悪玉の腸内細菌が定着しにくい傾向があることが示された。(Nature Microbiology 2025.1.10.)
- ・朝食習慣および朝食の質と抑うつ症状との関連性を調査した。朝食を抜くこと、朝食の質が低いこと、朝食摂取時間が遅いことが抑うつ症状に関連していることが結論付けられた。(Journal of Affective Disorders 2025.4.15.)

○ストレスチェックを9月に実施した。

対象：36名、受検者34名（94.4％）（前回は100％）、高ストレス者4名（前回は3名）、高ストレス者面談はなし。

全国平均に比べ、当事業団のストレス値は全般的に低かった。女性の身体的負担のみが全国平均よりやや高かった。

○職場巡視の際に防火防災対象物点検を実施した。

防災食品（パン）、飲料水、災害時トイレ、毛布などはこれまでどおり保存してある。

2021年3月、事務局が5階に移転した後は、各部署で管理することになった。

○各部署において30時間超えの超過勤務なし

【2】環境整備:

1. 労働環境測定

- ・2-3ヶ月毎当ビル管理会社が実施:問題なし
(各部署において夏期に相対湿度が上昇傾向、冬期に低下傾向)
- ・局所的に暑いところは扇風機で対応、冬期の乾燥時期には加湿器を使用
(加湿器のカビ発生に注意)

2. 職場巡視(8月13日、2月4日に実施)

- ・新型コロナウイルス感染症予防対策についても巡視
- ・耐震関連はほぼ済んでいる
- ・薬局では冬期に暖房が効きすぎ、扇風機を使用。
- ・診察室の窓辺付近で西日が強く眩しい。
対策:棚の荷物を整理し、ブラインドを使える様にする。
- ・地震対策として高いところに物を置かないなど注意して欲しい。
- ・事務局の通路が狭い。

3. 掲示物管理:月1-2回の掲示物のチェックの実施

- ・糖尿病教室の案内
 - ・人間ドック学会 市民公開講座の案内(9月)
 - ・新宿区健診のお知らせ(10月)
 - ・眼底検査のおすすめポスター(10月)
 - ・健康セミナーのお知らせ(11月、1月)
4. ご意見番アンケート(8件)・CSメモ(0件)(各ご意見に対し可能な範囲内で対応)

*ご意見番アンケート:健診5件、外来3件

— 健診関係—

- ・健診待ち時間が長かった。
- ・健診場所が寒かった:ビル空調のため調節は難しい。
- ・職員の対応は良く、スムーズに廻れた。
- ・診療所外のウォッシュレットが作動しなかった。ビル管理で修理済み。
- ・アンケート記入用のボールペンの紐が短く書きにくかった。対応済み。

— 外来関係—

- ・外来の朝の開場時間を早くして欲しい。
- ・外来受付と医師の対応が良かった。
- ・ワクチン接種で来院したが、ナースの私語が気になった。

ご意見番アンケートについては受診者から寄せられた声に対し真摯に対応する

*CSメモ:なし

ご意見番アンケート、CSメモについては事故防止委員会とも連携し、定期的に内容の点検と再発防止に努める

5. 受診者向け図書・ビデオなど

新型コロナウイルス流行以降、書籍類の設置は控えている。

6. その他:

- ・南海トラフ地震に対して緊急連絡先の確認、自宅での非常食、簡易トイレなどの準備をしておくこと。(8月)
- ・今年度から医業健保組合の健診に胃内視鏡検査が追加された。(9月)
- ・コバエ駆除を実施。(9月)
- ・職場環境改善のため、5階のレイアウトを変更予定。
- ・職員のインフルエンザ予防接種を10月から開始、2回まで無料接種可能。36名が接種。
- ・健診側テレビをスマートテレビに変更。(12月)

次年度の課題

1. CSメモの充実
2. ストレスチェックの継続実施
3. 冬季におけるウイルス感染症への対応
4. 新たな医療情報の提供

(船津 和夫 記)

薬事委員会

令和6年度薬事委員会総括

1. 新規申請: 3件

- ・エムガルティ皮下注I 20mgオートインジェクター: ヒト化抗CGRPモノクローナル抗体製剤
- ・アレックスビー筋注用: 組換えRSウイルスワクチン
- ・マンジャロ皮下注アテオス2.5mg 5mg 7mg: GIP/GLP-1 受容体作動薬

2. ワクチン関連

(1) 新規採用ワクチン; 2件

【RSウイルスワクチン】2023年発売で公費では扱われておらず、有効性の持続期間は追跡調査中、呼吸器や感染症専門医が在籍していないことも踏まえ、ホームページにはまだ掲載せず、主治医の判断で必要な方(希望される方)にのみ接種することになった。接種料金を提案し、所長会及び事務局に委ねた。

【肺炎球菌ワクチン・プレベナー20】沈降20価肺炎球菌結合型ワクチンは、免疫誘導能力が高く、再接種不要(ニューモバックスは5年以上あけて再接種)。ニューモバックス(23価)接種後の間隔は1年以上。

(2) 令和6年度インフルエンザワクチンについて

- ・令和6年度インフルエンザHAワクチン製造株
- ・今年度は検定落ちがなく製造は順調に進んでいるので、供給が不安定になることはないので企業の団体予約も例年通り取れる。納入価も変動なし。
- ・コロナとインフルの混合ワクチンはなく今季はそれぞれを単体で打つ。

(3) 新型コロナワクチンと他ワクチンの接種間隔について

新型コロナワクチンとインフルエンザワクチン以外のワクチンは、昨年まで「接種間隔を2週間空ける」とされていたが、改定され制限なく医師が必要と認めた場合には他のワクチンも「同時接種可能」となった。

(4) 乾燥弱毒性麻しん風しん混合ワクチン[タケダ]の出荷停止について

MR混合ワクチンが再び出荷停止となり、「風しん第5期」(国の風しん追加対策)の抗体検査はできてもワクチン接種はできなくなった。

3. 10月から始まる先発品選択による特別負担について

10月1日から、医療上の必要性がないにもかかわらず患者が「後発医薬品でなく先発品（長期収載品）を使いたい」と希望した場合には、両者の差額の4分の1を患者自身が負担する仕組み（選定療養）が導入された。処方箋の切り替えが必要。

4. 社会保険診療報酬支払基金による減点について

減点内容と査定理由を報告

5. 新しく登録された薬剤（当院初処方）の紹介；24品目

6. 自己血糖測定器のリニューアル

【フリースタイルリブレ2】スマホをReaderとして使用することも可能。1分毎に測定されたグルコース値がスキャン不要でリアルタイムに表示されるメリットがある。当院の該当患者さんはスマホアプリを使いこなせない為、新Readerを取り寄せた。

7. 出荷調整で流通が滞っている薬剤の紹介

毎月、「新たに出荷調整となった薬剤」、「前月から不足が継続している薬剤」、「在庫不足が解消された薬剤」を紹介。鎮咳去痰薬や消化酵素の在庫不足が著しかった。

以上

（丸田 陽子 記）

研究・研修・図書委員会

2023年度職員研究課題報告書を加藤委員長に御覧頂きました。

今年度も対面による職員研修会は実施せず、動画配信、DVD閲覧の形式で各職員時間のある時に参加し、研修終了時に閲覧確認書へ各自サインし確認としました。

研修内容としては、4月健康セミナー動画 10月AEDの取り扱い 12月個人情報保護法について研修しました。令和6年度の職員研究報告書については抄録、報告書を各部署より図書委員会フォルダへ期限内に提出頂きました。

（土田 陽子 記）

情報システム委員会

◎ 令和6年度情報システム委員会活動報告

昨年度までの“ITセキュリティ委員会”を改め今年度は“情報システム委員会”として活動した。昨年度は主に医療機関におけるサイバーセキュリティ対策について「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第6.0版」のチェックリストに沿って対応を確認し、各システムの連絡体制図の作成やID、パスワードなどの管理について一定のルール作りを行った。令和6年度は下記のとおり活動した。

1. 目的

- ・事業団のシステムにおける規程の整備と各部署にあるシステムのセキュリティ対応マニュアルの作成と更新
- ・各システムのセキュリティインシデント発生時の対応、他施設での発生事例や発生した事象に関する情報共有（不正アクセスなど外部からのサイバー攻撃や、従業員の不正による情報漏えい、さらに天災や設備不良による事故など含む）

- ・職員に向けたセキュリティに関する啓蒙啓発
- ・引き続き、医療機関におけるサイバーセキュリティ対策について「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第6.0版」のチェックリストの確認と対応

2. 背景

医療機関の管理者が遵守すべき事項として新たに「医療の提供に著しい支障を及ぼすおそれがないように、サイバーセキュリティを確保するために必要な措置を講じること」を盛り込んだ改正省令（医療法施行規則）が施行された。厚労省は医療法に基づく立入検査の項目にも「サイバーセキュリティ確保のための取組状況」を位置づけ、令和5年6月から病院などへの立入検査を実施する方針。「必要な措置」として厚労省が想定しているのは、最新の「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」にあるセキュリティ対策全般について適切な対応を行うことである。

3. 活動内容

- ・情報システム管理規程に関連する「医療情報システム運用管理規程」およびその他関連規程案を作成し、サイバー攻撃を想定した事業継続計画（BCP）案を策定
- ・日本総合健診医学会による実地審査で「直ちに改善が必要」と指摘された、サーバ室の設置場所や管理方法に関する対応案を策定
- ・ログ取得ができないシステムに対する対応案を検討・提案
- ・インシデント発生時においても健診・診療を継続できるよう、必要な情報の整理、データおよびシステムのバックアップ実施、復旧手順の再確認
- ・職員向けにセキュリティ関連の情報提供を実施
- ・システム障害発生時の対応手順を確認
- ・健診システムのリプレイスまたは一部改修に向け、システム委員会としての意見を伝える

4. 次年度に向けて

次年度は、現在策定中の各システム運用に関する規程や手順について、電子カルテおよび健診システムのリプレイス内容と整合性を図りながら、実務に即した具体的な形で整備を進める。これにより、システム運用のガバナンス強化と属人化の防止、効率的かつ安全な情報管理体制の構築を目指す。

特にセキュリティ対策については、リプレイスと並行して、早期に対応可能な項目から先行的に取り組む。なかでも、サーバ室の新設・改修に関しては、物理的なセキュリティ確保とアクセス管理の徹底を図り、運用体制も明文化した上で、速やかな運用開始を予定している。また、サイバー攻撃への備えとして、疑似攻撃を想定した対応訓練や、インシデント対応マニュアルの整備を含むセキュリティ対策を重点的に強化する。

これらの取組を通じて、医療情報の安全性確保と継続的な業務遂行体制の両立を図る所存である。

以上

（長津 秋彦 記）